

蓮田善明と三島由紀夫

——小説「有心」を中心に——

小倉 脩 三

三島由紀夫の小説「サーカス」の主人公である団長は、戦争が終わって危機感を失った日常の中で、サーカスという虚構の現実に至高のはげしい生の実感を求めようとする。しかし所詮、虚構は虚構でしかあり得ず、結局、彼の心の空白は埋まらない。三島文学の中で、終戦によって失われた生の空虚感は、一方で虚飾に満ちた戦後の日本社会への鋭い批判ともなっており、終生くり返されたテーマである。

これまでも蓮田善明と三島由紀夫をつなぐ精神的紐帯の存在についてはさまざまな指摘があるが、ここでは善明の唯一の小説「有心」を中心に三島の上記のテーマとの関連を考えてみたい。

小説「有心」は、善明が中支の戦線で負傷して一時帰国、昭和十六年一月、癒えない心の傷をいやすべく、郷里熊本に

近い阿蘇山中の垂玉温泉に赴いた時の様子を、心象風景を中心に綴ったものである。完結せず中断されたままになっていったものに、昭和十八年再度の召集令状を受けて熊本から門司に向かう時、車中で最後の補筆を加え、乗船に際し門司港から、「文芸文化」同人に渡すようにという手紙を添えて、他の遺品と共に妻敏子宛に郵送された。そして戦後、師である斉藤清衛や友人池田勉らの手によって、『祖国』昭和二十五年五、六号に発表された。

善明は小説の冒頭部分、療養に向かう心境を次のように記している。

切符を握り、時計の指す時刻から自分が外れる心配などありやうもなく、形の如く汽車が来ることを承知してゐながら、その下から、すぐ事実と自分とが離れて、隙

間風がその間に吹き込むのを感じた。ひよつとすると、
 ところでもないところに坐つてゐるのではないか、この中
 に斯うしてゐるまゝ、に此の駅がどこかへんな所に飛び移
 つてゐてしまつたり、或いは折角来た汽車が、見ると人
 が一杯乗つてゐるのに、自分が乗らうとするとどこにも
 窓も戸もなく、まごついてゐるうちに、「ほう」と汽
 車は自分を尻目に掛けて出てしまつたりしさうなことを
 考へたりするのであつた。直ぐそれが莫迦げた妄念だと
 自分で承知するのだが、現実と自分との二枚の像が一寸
 ずれてゐてぴつたりと密着しない感じは今更初まつたこ
 とでもないで、これはどれほど反省したり笑はうとし
 たりしても駄目だつた。しかし、神経的症状として諦め
 るのでもなかつた。この世間と自分との何としても密着
 しないずれ、又しても此処でずれ出した自分と駅との関
 係について、凝乎と目を据えるかのやうに、目の焦点を
 或る空間においた。それは大へん孤独の感を与へるもの
 であつた。

このすぐあとに、妻との

戦地から帰つてからお父さん何だか怖くつて、と妻は
 これまで二三度何かの拍子に言つたりしたことがある。

それをふと思ひ出して、「ゆつくり行つてくるよ。体を
 作り直さないと、東京へ行つても、同じだからね」と妻
 に話しかけてやつたりもした。

というやりとりが記されており、彼がここで感じている「現
 実と自分」との乖離は、彼が負傷によつて突然戦場から内地
 へ引き戻されたことと関連していることがうかがえる。戦場
 の常に生死のきわにさらされる極度の緊張感から、今おかれ
 ている現実へ、そのあまりの落差が、今なお「世間と自分と
 の何としても密着しないずれ」を生ぜしめている。したがつ
 て彼の療養の目的は、いかにしてこの「現実」に適應する自
 分を作り直すかにあり、それをあえて小説に記そうとする彼
 の試みには、その自己再生にこの「現実」に対する「自分」
 の新たな位置づけが不可避であるという思いがあつたと思わ
 れる。善明はこの小説に「いまものがたり」という副題を付
 している。この小説における「自分」探索には、新たな小説
 を創造するというひそかな自負があつたともいえよう。

善明は帰国して感じた現実との違和感を次のようにも記し
 ている。

戦地では、此の時代（到りついた、いはば現代日本の
 時代）の、もの倦い生活を、そこにこそ求めて抛つて生

き得ると覚悟して、實際戦地とても色々な絡みつきはあつても兎に角、説明なしに生きることが出来た。(中略)

ところが突然帰還を命ぜられると、これは容易ならぬぞと思はれてくるのであつた。その頃の日本の新体制の指導原理はいふ迄もなく素直に受け取れたが、それは、受け取つて直ぐ応と答へてそれで新体制の実践に入り得たとされるものではなかつた。「夫々の立場に於て」の臣道実践といふ簡単な事が、今更何事でもないやうなことでありながら何かびつくりさせられるやうな感銘を前から与へられてゐた。それはこの時局に国民の技術を求めてゐる言葉だが、これは今迄もつてきてゐる技術を一層努力して奉仕するといふだけでは済まないものがあつた。一体斯う求められてみると、今までもつてきてゐた技術とは、それは別の何かのための、はつきり言へば、口すぎのためといふことをも通り越して、「金」にすべてがあつた。「金」といふことに余り理屈めかした説明は無用であつた。唯物論でも個人主義でもない、唯「金」だけが生活の前景にも後景にも中景にもあつて、人は「金」の中で呼吸して、技術といふやうなものも、「金」に媚びる技巧の一つにすぎなくなつてしまつてゐ

た。

善明が帰国して感じた違和感は何によりもまず、戦時下にもかかわらず進行しつゝあつた、「現代日本」の「現実」の、頹廢のすがたであつた。「夫々の立場に於ける実践が、いつの間にかあからさまに「金」のための実践に置き換わつてしまつてゐる。

善明は温泉地での療養に当たつて、鴨長明の『方丈記』、『平家物語』、リルケの『ロダン』、金剛巖の『能と能面』を携えている。これらの本を携えたのは、これらを自分自身を立て直す糧とする意図があつたと思われるが、中でも特にこの小説でくりかえし引用されるのは、もともと日本古典の研究家として彼の関心の対象でもあつた鴨長明の『方丈記』と、リルケの『ロダン』である。まず、『方丈記』にふれる部分を引用しよう。

「方丈記」は、先づ初めに唯歎きだけで書かれたといふ稀有の詩を、次に言葉でなくて寧ろ行動でした詩であり、次に厳しく詩人の住処を、詩人の位置を意志し、占められてそれによつてのみ詩が書かれ(文字でなしに)てゐることを教へた。そして隠遁といふのが詩人の詩の

烈しい形式でしかなかった秘密が、否、権勢と利欲とだけが（その代表者は平清盛であつた）すべてであつて、文化が頹廢し喪失した時代に於ける詩人の、恐ろしいばかりの純粹な生の技術そのものを、示してくれてゐた。これは何ら現代の意味での厭世（これも現代の頹廢の一種にほかならなかつた）などでなくて、厭世といふことが、無類の強さで生を護らうとした唯一人の美しい行動であつた。

善明の鴨長明のとらえかたの特色は、その隱遁と厭世を現実からの逃避ではなく、積極的な「行動」であるとするところにある。文化が頹廢した時代における、それこそが勇氣のある行動というところである。

この隱遁という行動によつて現実に立ち向かう鴨長明の生の形式に重ね合わせられるのが、リルケの『ロダン』である。初めて『ロダン』にふれた瞬間を次のように記している。

「ロダン」と見た瞬間、それだけで、ふと今自分が心ざぐりしてゐるものに近づいたやうな氣はひを感じた。

それは文化なき世に対して鴨長明がこの世のものもはや形や跡もあり得ないとして、その荒廢そのまゝを諷するかのやうに隱棲閑居するといふことでその日の文化で

あり得るとした底に匿^{かく}されてゐるものであつた。それは寒に又「かたち」への切々たる憧憬にほかならなかつた。頹廢し果てた形式の穢はしさ、不純さに対してこの上ない潔癖を以て厳しく拒絶の姿勢を示しながら、それは清らかな純粹な形式を想ひ描かうとする詩人のとつたその時代の最も高い技術であつた。

リルケが『ロダン』を執筆したのは、確固たる名声を得ることになる『マルテの手記』の發表に二年ほど先立つ、一九〇三年のことだつた。たまたま婚姻した妻が女流彫刻家であつたことからロダンとの知遇を得て、親しくそのアトリエを訪うようになるのは一九〇二年九月のことである。以来、たびたびアトリエを訪れ、実際に作品にも、創作に向かうロダンにも、そして會話を通してその肉声にもふれて、芸術家として大いなる憧憬をもつて記したのがこの著書である。したがつてここにはリルケ自身が思い描く理想の芸術家像が重ね合わされていたといえる。善明も別の個所で引用しているが、その冒頭は次の一節で始められている。

ロダンは名声を得る前、孤独だつた。だがやがておとずれた名声は、彼をおそらくいさう孤独にした。名声とは結局、一つの新しい名のまわりに集まるすべての誤

解の総体にすぎないのだから。(リルケ著、高安国世訳

「ロダン」 岩波文庫 昭和十六年刊)

リルケがロダンに見出しているのは、その絶対的孤独、現実とけつして妥協しない孤高の姿勢であり、善明が鴨長明と共通のものとして看取ったものもそれであったといえよう。

善明はまた、つづけて次のような引用もしている。

ロダンが凡ゆるものを——その願ひをききとつて——生命を見出してやり、——それらのものが「自らを變形して」、しかも「生命を些しも失つてゐず、反対に、一層強く、はげしく生き」る、——純粹な、玲瓏たる生命へと

ロダンが確立した眞の孤独、時代からも世間からも隔絶した境地こそが、純粹に生命そのものの躍動のすがたをとらえる。「ロダン」の一節を引用しよう。

この発見とともに、ロダンのもつとも独自の制作が始まった。今になつてはじめて、すべての慣習的な造形美術の概念が、彼にとつて無価値となつたのである。姿勢ポーズというものもなければ、群像グループというものもなく、また構コンポジション成コンポジションというものもなかった。あるものはただ無數の生動する面であつた。あるものはただ生命であつた。そ

して彼の見出した表現手段は、ともにこの生命に向かつて行つたのである。今こそこの生命と、生命の充満とをわがものにする必要があつた。ロダンは、目をどこへ向けても必ずそこに存在する生命を捉えた。彼はどんなに小さな箇所でもそれを捉え、それを観察した。彼は生命のあとをつけてまわつた。(同前)

しかしながら今の目前の「現実」に、充実したと名付くほどの生の実感が得られないもどかしさを善明自身は次のように記している。

生きて歸つてもらつたので、もうどんな苦勞をしても構ひませんなどとも言ふのであつた。その心根を疑つたことはなく、いちらしいものに思ひ出、征後に出産をして、暫くは人を雇つたものの、その女が嫁いで行くと後は仲々人手が無く、兎も角も一人で切り抜けて来てゐた苦勞も言ひ尽くせぬものがあつたらうと察するのであつた。しかし自分には又一人の心の中に、誰にも言ひ得ず一人で考へねばならないものが戦地から持ち越されてきてゐた。家族の者達を取り巻いて身親みぢかに自分を見てゐるのに、彼らを見てやる余裕はなく、何も彼もこめて外界がもの倦うかつた。

そういう彼に転機が訪れるのは、温泉宿に起こった、偶然の出来事からであった。たまたま浴場で知り合った老人の娘のもとに、出征中の許婚者の戦死の報せが届いたのである。

しらせに來たのは老人の弟で、娘の叔父になる人であるらしい。浴場から帰つて、さすがに冷えて行く夜を感じながら、火鉢に倚つて或る思ひに耽つてゐる時であつた。何か庭向ふの棟のどこからか、若い女の押へきれなく鳴咽する声がふと耳に入つた。瀑の音と風の音に妨げられながらも、確かにそれは声をあげて泣く若い女の声であつた。

老人は品の良い五十がらみの、子供のようによやかな目をした人で、宿の客の中でいちばん親しくしていた人でもあつた。浴場でのよもやま話に、長女は嫁ぎ、兄は嫁を取り、つれてきてゐる娘はもう嫁入り先が決まつてゐるが、婿になる相手が出征して南支に行つてゐる、などと聞かされており、間もなく自分は歸つて、娘の母親が代わりに来る、とも語つてゐた。いかにも平穩そうな一家を突然おそつた悲劇であつた。

事件前後の心の動きを善明はさらに次のように記している。

実は二三日前から読み續けてゐる「能と能面」を手

にとつてゐたとはいへ、今浴場で見た中年女の肉体が、却つていまになつて何か惻々と迫つてくる、不思議な印象を整理しようとしてゐたのであつた。浴場では何か正視しかねて、むしろ強ひて冷静を装はうとしてゐた警戒に似た意識の表層を破つて、あの女の印象が否応なく踏み込んでくるのであつた。その印象は一言にいへば、荒じいものであつた。(中略)

この浴場の、静かな、狭い世界の中で、そこに浸る單純な人々の上に、まことにリルケの謂ふ「各一分間の中に千倍の人生が」あることを感じ、限りなく落ちて來ては浴槽を満たし、一杯に満ちては溢れ去つて、常に新しく満ち、休まず流れ溢れる湯とひとしい「生」の湧躍と流動と作用とを、まぎ／＼と見せられ、次第に自分の身体にぢかに享け取らうと乗り出さうとするものを自分の中に感じて來つ、あつたのであつた。(中略)

あの中年の女の見つめてゐたのは、男の肉体——況や自分の肉体などでなくて、女自らを、それも朽ちかけてゐるそのものとしての「生」、女として溢れる程に豊麗に生ききつた若い乙女のいのちといったやうなものを、

崩れ、曇りゆく己の肉体を以て見つめてゐたのだと思はれてくるのであつた。恰度そんなことを考へてきてゐたその時であつた、庭越しに、ものすさまじい瀑と風の音との中に、あの若い女の悲しい泣声が聞えたのは。

浴場で落ち湯に体を打たせていた、年齢の不釣り合いな老人の後妻とおぼしき中年女のすがたを思い起こしつつ、それを金剛巖の『能と能面』に、そしてさらにリルケのいう「生」の豊饒さと重ね合わせている。

そしてそうした時に、娘の身に突然起こつた出来事に接した心境を彼はさらに次のように記している。

思ひ出すともなく（全く人は一瞬に百千のことを思つたり見たり感じたりしてゐるものである。それはブルーストでさへどれほどでもそれを捉へて記録し得るものではない）、山へ来る時、電車から駅まで歩いてくる間にも感じた自分と現実との不一致の苦しみを思ひ出してゐた。そしてあの苦しい錯覚がこの山の湯の一室で極度に狂魔のやうに襲つたのち、今度は不思議な調和、いやそれは段々と恐ろしいまでの契合となつてきつ、あつたやうな気さへ今にするのであつた。

温泉場集うさまざまな人々についての見聞と、鴨長明の

『方丈記』、リルケの『ロタン』、金剛巖の『能と能面』などをめぐつてつづけられた思索、そして突然もたらされた娘の許婚者の戦死の報せという出来事が契合のように、これまで感じつづけていた「自分」と「現実」のいやしがたい「不一致」から「調和」へと、彼を導いたのである。

一方、善明はここへ至りつく間に、この娘やその父親、また湯に体を打たせていた中年女とは対照的に、温泉場に遊興目的でやってきた村の男達について次のように記している。

女中の話ではどこか町の警防団か何かで、そんなものがこんな所にと不審に思はれたが、何やらの慰勞を一泊の湯浴で果さうとするものらしかつた。そして明らかに、町方の者らしい気取りと傍若無人な露骨な横暴さで、費用だけの遊興はしなければ不経済といつたやうな取り外しやうで、本館の到る所で仲々の騒がしさであつたが、夕食後は浴場に押し出したその勢ひが、遂に女湯への進入となり、音頭をとる者があつて猥雑な歌が高唱されたりして、一ぺんにこの空気が變つてしまつた。浴場でそれを見て、自分もむか／＼した。しかも彼らの目や顔や身体に表はれてゐる頹廢と卑しさは目を蔽ひたい位で

あつた。

戦時にも関わらず若い青年も交えた集団の目を覆いたくなくような頹廢のすがたに、彼は強い不快の感情を示している。

この小説のストーリーの大筋はどのようなものになるのか。もともと身辺雑記ふうに語られる「ものがたり」であり、安易に断ずることは難しいが、この小説のストーリーの主要素としてうかびあがるのは、戦時下にもかかわらず、打算的な「金」中心の文明へと確実に進行しつつある「現実」の頹廢に對して、実際に戦地にいた者として強く感ずる嫌悪感と、鴨長明やリルケなどが啓示する、真に生命が生動し充満する生への憧憬、そして偶然起こった悲劇による救済という構図である。

善明は偶然の事件によつてもたらされた心境を次のように記している。

幾度も死を決せねばならない——一度きり死を覚悟して征で立てばいい、といふものではない。それは一度死線を通ると命が惜しくなるといふのではない。一度死線を通ると、次に別な心持ちの、も一つ死を決するものが求められるのである。何か死を決してかゝるものを

「生」が求めてでもゐるやうな、そのくせ、「生」にひたつきつた心持で、次第に放胆になつて行き、それと共に又簡単にではあるが深刻に、死といふことをも知つて、勝つ（か負けるかといふことは考へられないけれど）か負けるかの勝負を各瞬間に競つてゐる、——そんなことを妙に考へ耽つたりされるのであつた。

彼の心境は戦場における感情そのものに引き戻されている、といつてよいだろう。「何か死を決してかゝるものを『生』が求めてでもゐるやうな」そういう「生」を生きる心持ち、結局それがこの小説の中で彼が至りついた境地といえる。

小説家としての蓮田善明はどのような道を歩む存在であつたのか。残念ながら終戦時における非業の死という悲劇によつて「有心」以後作品は書きつがれなかつたし、「有心」自体も実際に彼の思い通りに仕上がつていたのか、疑問がないわけではなく、明確な判断は難しい。二回目の召集が下つて、やむなく、とりあえず作品に一応の決着をつけたのではないかと、思われるふしは、戦線離脱によつて生じた不安が、結局、先にも引用したように、戦場の心情に回帰しておさまるという、「ものがたり」としていくぶん新鮮味を欠く結末に

もうかがある。また、この小説が彼が名付けるところの「いまものがたり」として十分完成の域に達していたかといえ、鴨長明やリルケが観念的に現実の出来事に結びあわされているという側面がないわけではなく、今ひとつ、いわゆる物語性を欠いていると言わざるを得ないだろう。

しかしながら蓮田善明が「いまものがたり」とあえて付した問題提起は、この「時代」のはらむ問題を鋭敏に感じ取るものであつて、その示唆するところは大きい。

そして、ここで彼が提起した問題をかたくなに受け継ぎ、「ものがたり」として完成させようとつとめたのが三島由紀夫という存在ではなかったか。三島は、小高根二郎の『蓮田善明とその死』（昭和四十五年 筑摩書房刊）の序文に次のように書いている。

「予はかかる時代の人は若くして死なねばならないのではないかと思ふ。……然うして死ぬことが今日の自分の文化だと知つてゐる。」（大津皇子論）

この蓮田氏の書いた数行は、今も私の心にこびりついて離れない。死ぬことが文化だ、といふ考への、或る時代の青年の心を襲つた稲妻のやうな美しさから、今日なお私のがれることができないのは、多分、自分がその

やうにして「文化」を創る人間になり得なかつたといふ千年の憾みに拠る。

氏が二度目の応召で、事実上、小高根氏のいわゆる「賜死」の旅へ旅立つたとき、のこる私に何か大事なものを託して行つた筈だが、不明な私は永いこと何を託されたかがわからなかつた。（中略）

それがわかつてきたのは、四十歳に近く、氏の享年に徐々に近づくにつれてである。私はまづ氏が何に對してあんなに怒つてゐたかがわかつてきた。あれは日本の知識人に対する怒りだつた。最大の「内部の敵」に對する怒りだつた。

三島は「それがわかつてきたのは、四十歳に近く、氏の享年に徐々に近づくにつれてである。」と記しているが、三十一歳の作品『金閣寺』（昭和三十一年 新潮社刊）の主人公溝口は、金閣寺放火に至る心情を次のように記している。

金閣寺や銀閣寺には、うんと寄附をさせなければならぬといふのが、彼らの一致した意見だつた。収入は銀閣のほうが金閣の半分ほどであるが、それでも莫大な金額である。一例が金閣の年間収入は五百萬圓以上と思はれるが、寺の生活は禪家の常で、電気代と水道代を入れて

も、一年に二十萬圓の餘しかからない。貯つた金をどうするかといふと、小僧たちには冷飯を喰はせておいて、和尚一人が毎晩祇園へ出かけて使つてゐる。それで税金もかからないのだから、治外法權も同じである。ああいふところからは、容赦なく寄附を要求せねばならぬ。と交々言つた。(中略)

奇妙なことであるが、これは私の耳に入つた世間の批評のはじめのものであつた。私たちは僧侶の世界に属してをり、學校もまたその世界に在つて、お互ひの寺の批評をすることがなかつた。しかし老いた役員たちのこんな會話は、少しも私をおどろかさなかつた。それらはみんな自明の事柄だつた！ 私たちは冷飯を喰べてゐた。和尚は祇園へ通つてゐた。……が、私には、老役員たちのかうした理解の仕方、私が理解されることに對する、云はん方ない嫌惡があつた。

溝口の嫌惡の対象は、小僧たちには冷や飯を喰わせて祇園通いをする和尚以上に、寺の批評をして、結局は金集めをする、老役員たちの偽善ぶりであつた。

また、『午後の曳航』(昭和三十八年 講談社刊)の主人公登の遊び仲間首領は

「僕たち六人は天才だ。そして世界はみんなも知つてるとほり空つぽだ。何度も言つたけど、このことをよく考へてみたことがあるかい。その結果、僕たちにはあらゆるものが許されてゐる、と考へるのはまだ浅いんだ。許してゐるのは、僕たちのほうなんだ。教師や、學校や、父親や、社會や、かういふあらゆる塵芥溜めを。それは僕たちが非力だからじゃない。許すといふことが僕たちの特權で、少しでも憐れみを持つてたら、これほど冷酷にすべてを許すことはできないだらう。つまり僕たちは、いつも、許すべきでないものを許してゐることになる。許しうるものは實はほんの僅かだ。たとへば海だとか……」

と語る。ここでも「塵芥溜め」にまず比喩えられるのは、「教師」と「學校」である。登はこの言葉にうながされるように、船員稼業の足を洗い母親との結婚によつて陸の安定した生活に入ろうとする竜二の処刑を企てる。

ここで、『金閣寺』における「金閣」、『午後の曳航』における「海」にそれぞれ象徵されるものが、「有心」において鴨長明やリルケが啓示する、究極の美、もしくは真に生命が生動する生に通じるものととらえるならば、先に「有心」に

ついで述べた、日常的に進行しつつある「現実」の頹廢に対する強い嫌悪感と、完璧な美への憧憬、そして悲劇による救済という構図と同じものが、これらの作品にも明らかに現れてゐる。

二度目の応召に際して、「このころ私に何か大事なものを託して行つた筈」と三島は記している。具体的に残された小説「有心」こそが、三島にとって想像以上に大きな存在ではなかつたか。「有心」によって三島に継承されたものが、戦後の三島文学の形成に大きな役割を担つていたと思われるのである。

ただし、蓮田善明において常に身近なものであつた「悲劇」が、三島が受け継ぐ「戦後」という時代には、すでに虚構としてしか存在し得なくなつていたところに、蓮田とはまた別の小説家三島由紀夫の困難があつたとも言えるだろう。

注

(1) 小高根二郎著『蓮田善明とその死』(昭和四十五年 筑摩書房刊)

大久保典夫「『文芸文化』の位置」(『昭和文学史の構想と分析』昭和四十六年至文堂刊 所収)

野島秀勝「古今的抒情の凶暴——三島由紀夫と蓮田善明」(『終末からの序章』昭和五十五年 北宋社刊 所収)

松本徹「古今和歌集の絆——蓮田善明と三島由紀夫——」(『日本文芸の形象』昭和六十二年 和泉書院刊 所収)

中でも『蓮田善明とその死』は「三島由紀夫の発見と開戦」「善明と由紀夫の默契」という章をもうけており、三島由紀夫と蓮田善明のつながりについての言及が詳しい。また、小説「有心」についても詳しくふれられているが、どちらかといえば、一時帰国時期の善明の心境と行動を記す資料として用いるにとどまつている。